



寶隆公録  
 春夏秋冬

特別  
 ^4  
 8066  
 1



^4  
8066  
1



< 95-229 >

春

年内立去

作りぬれと霧のひりも年内に一村のまらあ

歳暮立去

日とくす年の日ぬもまらぬしういまのういあ

元日

清はゆる雷もあしうきに梅もあはる雪のまらあ  
ころにひいてくみ國福も万代のまのういあ

元日宴

猪人のゆきもみせういあもあまもまらあ



九日倍柿本歌前言志

執筆

雲井わらぬきここのころらふふせとまふらふら  
平太の  
六三才  
花もし又あはれとあはれも平らほらたののら  
らふらふらわらぬらふらふらふらふらふらふら  
夫のふらふらわらぬらふらふらふらふらふらふら  
のふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
ゆらぬらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
まふら

うらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
道徳書  
人そめあはれとあはれも平らほらたののら  
野和正四月大ふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
白あはれは路ふらふらふらふらふらふらふらふら

腕書き

百首  
あはれぬらふらふらふらふらふらふらふらふら  
のふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

五巻凡

吹にせふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
吹にせふらふらふらふらふらふらふらふらふら

立春雪

千夕月三  
こころぬく春の雪は晴るまでと初めは雪の光を

都鄙立春

あけはれはわが田舎とてきあ花のやこいひあきく春

處々立春

千夕月四  
あけはれはわが田舎とてきあ花のやこいひあきく春

早春

いそぎはゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
まづらのゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
いそぎはゆいぬふく花もあけはれはあきく春

早春霞

あけはれはゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
花の色はゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
いそぎはゆいぬふく花もあけはれはあきく春

早春雪

あけはれはゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
花の色はゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
いそぎはゆいぬふく花もあけはれはあきく春

都早春

あけはれはゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
花の色はゆいぬふく花もあけはれはあきく春  
いそぎはゆいぬふく花もあけはれはあきく春

山早春

かたあけのついでにふと地をひらき花のゆかりをいり

用路早春

春よけのいりけの川の開路も霞をまのまていりる

浦早春

浦のわきも水もなほあやも霞のまのまのまのま

初春

初春のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

も霞のゆかりも初春のうらみの初春のうらみのうらみ

初春霞

紫裡春日社は樂百首の

初春のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

初春祝

初春のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

子日

子日のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

深山のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

初春のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

子日松

子日のうらみの初春のうらみの初春のうらみのうらみ

千之明三

子日とほむらし二糸のちかめしむる花をたしむる

霞

霞のりすむにけり一丁の色をまきりぬりぬり

見もやいさかほり月夜に胡わしけき色の色と霞のり

しりよとも吹くちかめしむる花をたしむる

天のりすむにけり一丁の色をまきりぬりぬり

立つすきり袖に凡ゆる女のたしむる

和田の糸をけりし浪と蝶かしの花をたしむる

美といつしむるをゆりて田子の海やすき浪のたしむる

憐霞

かきさしむるはあけし美のちかめしむる

かりゆきかみ紋にけりし花をたしむる

胡霞

胡のりすむにけり一丁の色をまきりぬりぬり

ふのりすむにけり一丁の色をまきりぬりぬり

夕霞

夕霞のりすむにけり一丁の色をまきりぬりぬり

霞中月

うめくしみるおのの月経に花さのつゆのまはりけり  
山霞

し朝のあけほのこころのゆくまのそよ風を  
白雲の雲ちかす井のゆくりはよ立ちよつたの  
まよてのこころのゆくりのゆくりのゆくまのそよ風を

霞隔山

めいみよの霞の雲井路のゆくまのそよ風を

開霞

うらら多きゆくまのそよ風のゆくまのそよ風を  
天のゆくまのそよ風のゆくまのそよ風を

まにそよ風のゆくまのそよ風を  
けいあめふくのゆくまのそよ風を

園路霞

しりあけのゆくまのそよ風を

杜霞

文巻三十三日次  
あめふくのゆくまのそよ風を  
あめふくのゆくまのそよ風を  
あめふくのゆくまのそよ風を

野外霞

永正十七日次  
あめふくのゆくまのそよ風を



野外明震

明震の記述よりこの地の地味もさうやうの地の震

白紙四五四頁

原邊震

凡そその地味もさうやうの地の震

原上震

文明前 軍事家行合

去の久い所の地味もさうやうの地の震

檜原震

河上の地味もさうやうの地の震

橋震

その地の地味もさうやうの地の震

河震

千五明三

河上の地味もさうやうの地の震

江震

その地の地味もさうやうの地の震

海邊震

その地の地味もさうやうの地の震

千五二九六月日朝倉貞景逸善

その地の地味もさうやうの地の震

その地の地味もさうやうの地の震

海震

その地の地味もさうやうの地の震

能成ゆめららふまかのみとてあしはなむかじ素  
海路霞

かきこころあはむのしよ那田のふもはらふ  
海上晚霞

誰彼ゆめららふまかのみとてあしはなむかじ素  
湖上朝霞

羽子のたれしとてあしはなむかじ素  
いづれか羽のたれしとてあしはなむかじ素

いづれか羽のたれしとてあしはなむかじ素  
帆場霞

浦霞

永正三十四月欠  
いづれか羽のたれしとてあしはなむかじ素

霞深由也

永正三十四月欠  
いづれか羽のたれしとてあしはなむかじ素

鶯

昔もあはむかじ素のたれしとてあしはなむかじ素

永正三十四月欠  
本年もあはむかじ素のたれしとてあしはなむかじ素

し初あはむかじ素のたれしとてあしはなむかじ素

永正三十四月欠  
いづれか羽のたれしとてあしはなむかじ素

待雪

わきつばきや宿ふらけ 園の梅花もさきつばきのそ  
初鶯

しつばきの後 ちかきつばきのさかひに宿の梅え  
見しつばき せし日の初鶯のめいめいさかひに宿の梅え

旧集鶯

いづかたにわらわりの宿の梅もさかひに宿の梅え  
さきつばき

うきつばき ちかきつばきのさかひに宿の梅え

鶯入新年詠

霜雪にせせふおひしつばきのさかひに宿の梅え

園鶯

いづかたにわらわりの宿の梅もさかひに宿の梅え

竹鶯

夏冬もつばきしてさかひに宿の梅え

竹林鶯

消ゆかたの宿の梅もさかひに宿の梅え

晚鶯

夜つばきもさかひに宿の梅え

朝鶯

あけつばきもさかひに宿の梅え

朝の霜はつゆらけぬ  
こえがらゆき  
花の結ばしけり  
つらねの宿を  
つらねの宿を  
つらねの宿を

永三四月欠

野朝鶯

朝の霜はつゆらけぬ  
こえがらゆき  
花の結ばしけり  
つらねの宿を  
つらねの宿を  
つらねの宿を

永三四月欠

つらねの宿を

谷鶯

つらねの宿を  
つらねの宿を  
つらねの宿を  
つらねの宿を  
つらねの宿を

鶯出谷

つらねの宿を

山家鶯

久庵二十四月欠

何鳥

つらねの宿を



原の宿も雪に  
續撰吟集三末若菜

山も雪に降りて  
雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

野若菜

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

水邊若菜

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

雪上若菜

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

津若菜

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

寄若菜説言

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

残雪

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

雪の宿も雪に  
雪の宿も雪に

山にたれどあしと想ふはしむくはしむの雪もちりり

山残雪

おとしつ消ゆる松の枝の雪ふとせれ雪の花とくみめ

竹畔残雪

竹と並にゆい雪の道もゆいゆいとせせわ雪はらう

垣根残雪

山雲つらての雪の敷かぬうら福くも雪ふくく

岩残雪

春日山雲のいりけえれぬや雪のじぬ木岩ぬくみぬ

野残雪

消すともあふふいしむや白雪のあつらの雪の雪の日程よ  
消ぬましあふく雪ののし雪はりぬの人の雪の房の枯せ

雪書

こころゆらゆらゆらて雪の日小残るしゆらゆら雪ふら  
續撰吟み大永三又三  
おひひり花散とせて白ふも柳の枝の雪のうらせ  
續撰一  
うららる消ゆる雪の雪をまげこのころ松の雪ふら  
消ぬればゆきみゆのうらひ日新ゆらゆらゆら雪

餘雪

文龜三四月  
うららる雪のこけこころゆらゆらゆらて葉の地を風のとけい  
花し又うらゆらゆらゆらてゆらゆら

去るしこころ出づぬのいふにわづらひる谷のきつ風  
ふゆにとも岩りたふらふもやれぬもあはれにふらふ  
去らむいみじくもふらふもやれぬもあはれにふらふ  
ゆきもいみじくもふらふもやれぬもあはれにふらふ

餘寒少

うけのしりれしこころ去るちぬきもあはれにふらふ  
流鏝石

立ちりし羽ふの古もあはれにふらふ  
二月餘雪

立ちりし雪もあはれにふらふ

氷不解

ふゆのふらふもあはれにふらふ

氷始解

おろりか氷もあはれにふらふ

氷消田池

河にほ雪のふらふもあはれにふらふ

梅

氷雪三四月

吹雪のふらふ梅のふらふもあはれにふらふ  
花と梅のふらふもあはれにふらふ  
ふらふもあはれにふらふ



承正元十四月廿

梅のつぼみはさかすかにあけ

つぼみはさかすかにあけ

つぼみはさかすかにあけ

つぼみはさかすかにあけ

梅未開

梅のつぼみはさかすかにあけ

梅未開

梅のつぼみはさかすかにあけ

梅似雪

梅のつぼみはさかすかにあけ

院梅

梅のつぼみはさかすかにあけ

晴梅

梅のつぼみはさかすかにあけ

月亦梅

梅のつぼみはさかすかにあけ

夜梅

梅のつぼみはさかすかにあけ

梅のつぼみはさかすかにあけ

梅のつぼみはさかすかにあけ

じつと... 梅... 梅...

永寛六日欠

暗夜梅

うらやま... 梅...

永寛三日欠

路梅

うらやま... 梅... 梅...

路梅

梅の... 梅...

梅風

おき... 梅...

うらやま... 梅...

梅童風

梅... 梅...

梅盛

梅花... 梅...

梅童衣

平の... 梅...

梅移袖

永寛二日欠... 梅...

梅番苗袖

うしろたてあつらんかしのつらえまかほふてりし袖の梅

### 梅速客

花のよふあひのくささくせんきしんはまの宿の梅

### 禁中梅

梅つてもう袖さやふれよめあはるきさの二言のうら

### 野梅

ふしむらうのぬかしの梅のさるさうのそにふやさめゆ

表の那しほの草のれよ咲梅のさるさうのそにふやさめゆ

那ふよえ咲るふ花の色もや山のさうのそにふやさめゆ

### 野宿梅

さうしりりしうでしめは咲梅もやとれおるの唐のり丸

梅もやとれおるの唐のり丸

### 里梅

續百首和歌石清水社法樂 生清法京勸進

夕月東きうらえしめは咲梅もやとれおるの唐のり丸

こゝろに花さしうのさるさうのそにふやさめゆ

ふとれおるの唐のり丸

### 古宅梅

ついでに月ふしりうの房からてりし袖さうの梅もやとれ

### 戶外梅

續撰六六八三三三三

忘れたる袖をぬぐはん果の戸のついでに吹くか梅の  
まじりてしるす梅の戸のついでに吹くか梅の

斬梅

永正三三三

のし雪のうらもしめぬ梅の枝のついでに吹くか梅の  
ゆりよる梅の枝のついでに吹くか梅の  
心ゆく梅の枝のついでに吹くか梅の  
昔梅の枝のついでに吹くか梅の  
かゝて世の花のついでに吹くか梅の  
續撰六六八三三三  
梅の枝のついでに吹くか梅の  
梅の枝のついでに吹くか梅の  
梅の枝のついでに吹くか梅の

宮梅

凡そ又かきぬけ宮のついでに吹くか梅の

庭梅

文龜元十月廿日  
夕附長うこころし庭のついでに吹くか梅の  
永正三三三  
之世のついでに吹くか梅の

若木梅

十文明十三  
けしひかきぬけ梅のついでに吹くか梅の

白梅

冬ももかきぬけ梅のついでに吹くか梅の

紅梅

もろろこの色こそ見えず梅のうらみはいつか秋の情也

江梅遅

しる梅の遅き世のまはるは梅のうらみはいつか秋の情也

梅浮水

梅のうらみはいつか秋の情也

梅実松芳

年としみねの石のうらみはいつか秋の情也

梅花久董

とほりの中はいつか秋の情也

梅散得客

梅のうらみはいつか秋の情也

梅有佳色

咲くはいつか秋の情也

柳

柳のうらみはいつか秋の情也

柳亦春

柳のうらみはいつか秋の情也

永正三十九四月

柳緑緑新

申す  
しらべふすいふいふくじむあしぬの年いらりあまの柳

柳露

久松元四日欠  
いまは次から柳枝に露花のしつこいよれとくわくろ

白き玉の玉のねまやにる結のしつこいよれとくわくろ

枝にわくもあつひる房とくわくろとくわくろ柳の末とくわくろ

あつひる玉のねまやにる結のしつこいよれとくわくろ

森のうへとゆらうにいま次初冬の柳の葉のせのうらむら

行路柳  
このゆめとくわくろわたりたの道のりこのゆめとくわくろ

柳風

しんもそのらう木れ柳あつたかかひきしんもそのらう風

柳藤風

花とくわくろかたうにけいもゆめとくわくろの葉のせのうらむら

池柳

あつひる玉のねまやにる結のしつこいよれとくわくろ

ゆめとくわくろの葉のせのうらむら

河邊柳

水とくわくろにけいもゆめとくわくろの葉のせのうらむら

河柳

かしの木に川を流す柳のていついふとて根を

岸柳

きしきしとて水に流す柳のていついふとて根を

堤柳

水あらし池のほとり柳のていついふとて根を

遠村柳

あじあじ入江の村の柳のていついふとて根を

行くゆく道村の柳のていついふとて根を

永三四月欠

雲柳花水

山とよの川に柳のていついふとて根を

柳出系

いふいふとて水に流す柳のていついふとて根を

水邊古柳

永三四月欠

立田川に柳のていついふとて根を

柳廿二氣

ていついふとて水に流す柳のていついふとて根を

若草

あじあじとて水に流す柳のていついふとて根を

かえりて雲のていついふとて根を

きしきしとて水に流す柳のていついふとて根を

おどろきみづらき  
うぐいすのついでに  
草階青月

雪をこけてふもとのさらけ  
いけのまに外面の雪  
山家若草

冬草の雪回ゆるるま  
冬草の雪回ゆるるま

日のおひらき  
野莖

すこし草まよひ  
はじまら

春草

何れ小田の雪  
磯草

磯草

あしなや  
蕨

早蕨

ふりしかり





春やあけぬ露のころとさうらと夏は月と秋のふくとさうらつ、  
かすこぼく光にふれて花のころと月のもよこのむとさうらぬの  
かえかりや芳たし秋の月とさうら守る春の敷とさうらし

春曉月

花のふしみよりよかき庭の面よりしつとさうら有明の月  
のこぼるの月と露の袖がうらうらいとむらさきとさうら  
折とあふ花とさうらととくれぬしけがらうさうら有明の月

春月 曉静

永三十三六四日欠  
夜はぬかといなりおき出と花の下に月が有明のをたさふ  
江春月

月とあけぬ露のころとさうらと夏は月と秋のふくとさうらつ、

花洛春月

永三十三六四日欠  
入のふと山路とすれとあけぬの月とさうらとさうらと

春月 曉静

一和ぬるをさうらとさうらと月庭と露とさうらとさうらと  
さうらとさうらとさうらとさうらとさうらとさうらと

春月 曉静

霞ふふとさうらとさうらとさうらとさうらとさうらと

春月 曉静

いとしさうらとさうらとさうらとさうらとさうらと

春月勝

月はうらやましくしてさくらで母の春のいろは花を海へせて

春月曲

老世の物さしひやせの月をさすまの春のいろは  
心と花の袖にほくまけて花のいろは春のいろは月

春曙

正安二年四月  
花のいろは春のいろはまのいろはに花のいろは  
みええやとみええふおとふとてぬまのいろは  
ふとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは  
うらやましくしてさくらで母の春のいろは

ふとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは  
ふとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは  
ふとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは  
ふとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは

都春曙

文龜四年三  
おとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは  
おとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは

時春曙

おとてぬまのいろはとてぬまのいろはまのいろは

春曙鴈

そこの今のを成るる花は梅のついでにやとてさきのおちめ

永正十二年四月六日 春駒 しののめの

かたより見れば人のこゝろのわづらひもさき氷草成世はかり

春雨

花のそとゆかり梅の袖のふとにけりてあつた雨のふゆり  
わらわらめしきのゆきをこころあつたつらさき草の杜の葉に  
踏みゆかみこころはさきの雪のみこころ雨にゆきあふりつれ  
花のそとゆかりつらさきこころふゆきの羽をこころさきゆきのせう  
こころあつたつらさきこころの葉をゆきこころさきのゆきのゆき  
下りてゆきあつたつらさきのこころゆきゆきゆきゆきゆきゆき

夕月夜とつらさきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
みづうらよしにゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
さきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
花のなつたつらさきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

夜も雨

梅のそとゆかりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

唐も雨

千文明三 唐も雨ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

野暮白

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ  
みちしりるいぬ

永正二十二年

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

春鷹

秋をこぼるるあつらひ天はうねりてさうれ暮のうらみ

白鷹

まをめてあつらひのあせを花よのそとりの影と

年くこころの鷹のまのこめ名をいれあつてかかふ山つれ  
文永元三廿四の月  
見もていかにすうこつまき花をほむこころ鷹のこころみかふる

永正九百首

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

白鷹如書

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

院白鷹

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

夕白鷹

あつらひの影をさすまじり垣をまらうけけりあめ暮ぬのそ

文龜三二四日欠

帰鷹函

おもしろくあらわての書路...  
永正七四日欠

千五朔十三

嶺西鷹

さしよしと...  
千五朔十三

諺指西鷹

河のれ... 梅の花や...  
千五朔十三

遊京

しよるも...  
永正三四月欠

梅

年...  
永正三四月欠

梅柳更枝

もの... 花  
永正三四月欠

大園亭舎尚症

さしよるも...  
永正三四月欠

鳴花のせに...  
永正三四月欠

永正二十四日

永正三十四日

本門回信吉社法樂百首

續撰五ノ三三七カ

文巻三四四カ

あけのぼる雲のそめはたかきつらぬものもよかきつらぬ  
吹くはらばらけの花つれなきとほしきものよせ  
のしづかきよきいづれもあはれなむかひあはれなむかひ  
つゆあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとせめてあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
あはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
あはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
あはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ

宗政信康山回下向の寄る一首花とよ

續撰一庭の花とて一首返り歌

續撰一享禄又三二日庭の花とて一首内府入道竟定

いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ

深山花遅

天明六七八カ

待花

いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ  
いとあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひあはれなむかひ

永正九七カ

御持花

花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
いと花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに

雨中御花

花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに

尋花

花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに

遙尋花

花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに

如く尋花

花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに

栽花

花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに  
花のいろはの巻をよむに花のいろはの巻をよむに



老栽花

うしろのまはりの山櫻うら若宿の花よりかし

初花

みぎのうしろの初花の色は紅ゆるゆるをあたはせし  
鳥の録しからうらむじつ柄もわのうらむ花の色は

山花

花よまてせしものみかたにせくもゆるゆるめくひり

山花末遍

うらの雪のうらむ花のえめまて清く柄やえしからん

見花

あつに晴らるる花はかたして色あつたのいもいぬ

このしつふりり花はかたしてあつたぬいぬ

續撰かまきみ静見花

世

そらむゆりつれきそつて老るる花の色は

みづうらむらむ花はかたしてあつたぬいぬ

かまきみゆりつれきそつて老るる花の色は

見花恋友

永正三回二日

花よまてせしものみかたにせくもゆるゆるめくひり

老後見花

老らぬ花よりえはつてあつたぬいぬ

文田吉の集詩并合

見花忘恥

りら本はしたらふすあふらふあふらふら花はらふら

花盛

まはせはけしつら花物つらまはせ花はらふら  
雲はまらふらふら花はらふら  
みふらふらふら花はらふら  
吹とゆらゆら花はらふら  
あふらふら花はらふら

花色映月

花のらふ月のふらふら花はらふら

風静花芳

ゆらゆらふら花はらふら  
永三九三月月次  
世中みそして花はらふら

花苗人

かりなふら花はらふら

既花

花はらふら花はらふら  
續集  
あふらふら花はらふら  
あふらふら花はらふら

変花

昔ハ又秘<sup>り</sup>く<sup>る</sup>き<sup>の</sup>ふ<sup>り</sup>ん<sup>の</sup>つ<sup>き</sup>の<sup>う</sup>つ<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ば<sup>も</sup>花<sup>を</sup>木<sup>に</sup>花

馴花

か<sup>の</sup>こ<sup>ら</sup>い<sup>し</sup>よ<sup>お</sup>も<sup>か</sup>し<sup>き</sup>の<sup>り</sup>な<sup>ご</sup>れ<sup>の</sup>田<sup>の</sup>花<sup>の</sup>下<sup>の</sup>花

未飽花

あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>や</sup>く<sup>も</sup>の<sup>花</sup>は<sup>十</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

花将不雨

永元四四月

花<sup>は</sup>け<sup>い</sup>し<sup>や</sup>う<sup>の</sup>し<sup>ら</sup>ん<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

遠花

あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>や</sup>く<sup>も</sup>の<sup>花</sup>は<sup>十</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

依花遠の

花<sup>は</sup>け<sup>い</sup>し<sup>や</sup>う<sup>の</sup>し<sup>ら</sup>ん<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

増撰一禁裏る曉花

心<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>や</sup>く<sup>も</sup>の<sup>花</sup>は<sup>十</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

曙花

十冬月十三

あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>や</sup>く<sup>も</sup>の<sup>花</sup>は<sup>十</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

朝花

あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>や</sup>く<sup>も</sup>の<sup>花</sup>は<sup>十</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>

夕花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

春夕花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

月夜花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

あすは又いづかきつらき花のうらみ

月夜見花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

毎年愛花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

夜思花

永正十八日

あすは又いづかきつらき花のうらみ

思花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

雨後花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

雨後花

あすは又いづかきつらき花のうらみ

文永四三月

あすは又いづかきつらき花のうらみ

あつらひのあはれいふはなをばらばらとて

花同書

永三三三

うづらひのあはれいふはなをばらばらとて

花同書

吹凡のあはれいふはなをばらばらとて

ささのあはれいふはなをばらばらとて

花交松

うづらひのあはれいふはなをばらばらとて

花備花

ふりかへてかきかへてのあはれいふはなをばらばらとて

花備山

ゆふのあはれいふはなをばらばらとて

嶺花

續撰二思亭の花は細川をばらばらとて

あはれいふはなをばらばらとて

炭上望花

ふりかへてかきかへてのあはれいふはなをばらばらとて

候花

あはれいふはなをばらばらとて

花

續撰二思亭の花

あはれいふはなをばらばらとて

一行のたのしみはのりてしらと花本よのちふくはしめ

用花

あまほやもさしりらつた花の色は國の戸へくわさるる  
と田舎のさしりらつた花の色は國の戸へくわさるる

岸花

しらたのりらつた花の色は國の戸へくわさるる  
池邊花

日みりてさしりらつた花の色は國の戸へくわさるる  
花浮水

又巻三三四頁

わらわらつた花の色は國の戸へくわさるる

又巻三三四頁

しらたのりらつた花の色は國の戸へくわさるる

又巻三三四頁

しらたのりらつた花の色は國の戸へくわさるる

野花

しらたのりらつた花の色は國の戸へくわさるる

野花

しらたのりらつた花の色は國の戸へくわさるる

野花

しらたのりらつた花の色は國の戸へくわさるる

野花留人

何れも心のよき花をいかにいかにいかにいかに

胡花

文明三十八禁程

胡花は幸す首續

花のよき花をいかにいかにいかにいかに

白花

船の波舟のよき花をいかにいかにいかにいかに

破花

一ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

禁中花

やんがものよき花をいかにいかにいかにいかに

お世の花をいかにいかにいかにいかにいかに

禁中花考

鳴るふふふふふふふふふふふふふふふふふ

社頭花

文龜元三十六内裏花見續

うはらふふふふふふふふふふふふふふふふふ

古寺花

善凡の花のよき花をいかにいかにいかにいかに  
續程一禁裏の  
初花のよき花をいかにいかにいかにいかに

山寺花

いづれもさく物もかたぬ昔の袖くらもまらびり今もあはれ  
あ御花

花のちかまふぬし香とゆりもてふふくむかた宿のあけい  
は茅原かみぶくから花あはれまはりゆくまのまはひりた  
草庵花

山家花

ゆりもさくものあはれまはりゆくまのまはひりた  
夕田くさくぬかふる果の戸もまはりゆくまのまはひりた  
閑居花

續撰吟集三

やうしめいこころをけらぬ花あはれまはりゆくまのまはひりた  
田中花

花鏡

あはれまはりゆくまのまはりゆくまのまはひりた

花のちかまふぬし香とゆりもてふふくむかた宿のあけい  
は茅原かみぶくから花あはれまはりゆくまのまはひりた  
花のちかまふぬし香とゆりもてふふくむかた宿のあけい

大和七四夜唐月忌始遊善

こころも花のちかまふぬし香とゆりもてふふくむかた宿のあけい  
花雲



花のしほひくさくさのついで花のしほひくさくさのついで  
よき時といた世のまはるかめさく花はよきまはるかめさく雲のまはるか  
雲しうしうかたしうかたせに花は根さくおもしろく

花似雲

おもしろいそなたのついで花の雲のしほひくさくさのついで  
咲てしほ花のついで花のついで花のついで花のついで  
夕やしの花のついで花のついで花のついで花のついで

寄雲花

け期しうせうかふくさくさのついで花の雲のしほひくさくさのついで  
花雪

花らいつくさくさのついで花のついで花のついで花のついで

花波

續撰一葉裡  
浪のついで花のついで花のついで花のついで

寄露花

花のついで花のついで花のついで花のついで

花梢

續撰一葉  
花のついで花のついで花のついで花のついで

花梓乃

花のついで花のついで花のついで花のついで

花下言志

永正八三四月次

花をいこころ物か今かあはあはううらん春の本のむと

花下忘曲

あふれいそとにゆしあの花のむと老あはくはあは

花下送日

しるしあふのほの花のむと物いれあのかの春の本のむと

あはれとてあはれしりやあまの花本もあまのきにいり侘あ

花下旅宿

まふとてあまのあはれやあまのむとあまの花と花をゆせて

花衣

月まにけいぬ物うあはれあまの花もあまの色かあは

千文明十三

はあはれ花うあはれあまのむとあまのむとあまのむと

花被

人あはれいあまのむとあまのむとあまのむとあまのむと

花麻

文明三三三廿五瓦

うの川らあはれ花のあまのむとあまのむとあまのむと

續標一禁裏岩 花錦

あはれあまのむとあまのむとあまのむとあまのむと

花有運速

永正八三四月次

あはれあまのむとあまのむとあまのむとあまのむと  
永正十四月次  
あはれあまのむとあまのむとあまのむとあまのむと

花戀老

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

暗花不辨庭

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

花形見

あはれに花をみれば花の影もあはれに  
花を

て風花散

永享三四月欠

凡そこの世に花をばらばらと  
いふは花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに

落花

あはれいしや世に花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに

夕落花

永享三四月欠

人色に花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに

落花似雪

落花似雪のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに

落花如雪

落花如雪のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに

落花入簾

永享三四月欠

落花入簾のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに  
花のついでに花のついでに

庭上落花

夕べの庭上落花の影も消ゆらん花のちが

昔上落花

明戸の昔上落花の影も消ゆらん昔上落花のちが

花落薰衣

二葉の花落薰衣の影も消ゆらん花落薰衣のちが

花理昔

宿の昔上落花の影も消ゆらん昔上落花のちが

山路踏花

山路踏花の影も消ゆらん山路踏花のちが

昔花迷懐 或題花核見花

昔花迷懐の影も消ゆらん昔花迷懐のちが

昔花神紙

昔花神紙の影も消ゆらん昔花神紙のちが

昔花祝言

昔花祝言の影も消ゆらん昔花祝言のちが

花光英万年

花光英万年の影も消ゆらん花光英万年のちが

花の影

花の影の影も消ゆらん花の影のちが

永正六年四月

永正三四月次

花譜

のゆきこしよきのひぬしよしひつと木のつな花のあはれ

残花か

咲きしる花とらたあつてしつて一本のいろせ

永正三四月次

残花薫風

いふふ花も有やあつていふふもあつていふ

深山花強

永正三四月次

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

三月三日

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

永正三四月次

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

桃

永正三四月次

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

桃花曝錦

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

雉

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

野外雉

永正三四月次

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

野雉

しらべや磯のきつはきり結てかみ子とあかきるまの

永正七三四月欠 野雲雀

かくひらめかぬ雨めらきちり入るきりまきりまの

朝雲雀

うらみ今あかり見れさきしちて朝の雲にひらりて

永正四三四月欠 呼子鳥

のやうらめちぬうせて万代のこゝろよのふいさ

千五明三 野遊

心のとせきの海とかわる日ぬうはじいふふ松のたわがやに

野遊送年

續撰ハ せんとて花うらぬの海もふらりときかすめたつた

春日蓮

ゆきり花うらぬと海にすくはれはれきり日か

三音傍馬

けりて霞の度しあがりるうらひもえりあふか

永正七八月欠 雨後苗代

かぬ山のあかりもあつて苗代はくちのきりて

何苗代

暮ら田のうららりてけり川せりあつたてはくちのきり

その里にうらりて苗代よかしてあつた水ぬあつて

田蛙

河一めし山田の蛙のこゝろもなほふるまひてん  
杜若

橋若

庭よりてららぬ橋のこゝろ花をよそふ春の他は

款冬

小庭のまよひのこゝろみとちのなほ花をよそふ春の他は  
なほふるまひてん  
山吹のこゝろをよそふ春のこゝろ花をよそふ春の他は

款冬盛

咲きし波のこゝろ花をよそふ春のこゝろ花をよそふ春の他は

池款冬

千支明正三  
山吹の花のこゝろ花をよそふ春のこゝろ花をよそふ春の他は

何款冬

千支明正三  
夕霧の枝のこゝろ花をよそふ春のこゝろ花をよそふ春の他は  
夕霧の枝のこゝろ花をよそふ春のこゝろ花をよそふ春の他は

夕霧

松の葉のこゝろ花をよそふ春のこゝろ花をよそふ春の他は

戸外者



有らばよ人の意よりまりの戸の花にわたりて  
白咲藤

有らばよのうらまゝに花入りて入らばよのうらまゝに

白藤

千寿三 白藤の多うらまゝぬの白藤か白藤か白藤か

社名藤

も入ててもみてしるま日しる井力なり花うらまゝ

松花

雲霞の松のえかり花水ありえのぬの  
天文三三三月廿四日 咲うらまゝのゆまききせて花うらまゝ

まの庭よりよの春は花はしる花はしる花はしる

まの庭よりよの春は花はしる花はしる花はしる

夕附日いつまゝに松のえにかり文のうらまゝ

松間花

三首懐紙

松のえにかり文のうらまゝに松のえにかり文のうらまゝ

有花松花

永正十六三廿八

有花松花のうらまゝに松のえにかり文のうらまゝ

有花松花のうらまゝに松のえにかり文のうらまゝ

有花遠松

松のえにかり文のうらまゝに松のえにかり文のうらまゝ

續撰一

庭の春をわけてをばけしとけけりよ

あわりの友の久しきうりめをまねとめけり宿の本末を

惜まぬ友

永三又三四月

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

惜まぬ友

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

春欲言

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

言まぬ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

言まぬ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

言まぬ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

言まぬ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

永三又三四月

あつちの春をわけてをばけしとけけりよ

書去月

いづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり  
永正十三四月次  
しつと月しあふ花ののしみじいせぬ書の影に  
花三三三三  
しつと月しあふ海をくまの一月はあふあふ  
いづれり月しあふ花ののしみじいせぬ書の影に

書去海

あふいづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり  
續撰吟集三  
書去鐘  
花ののしみじいせぬ書の影に  
書去五五

書春簾

あふいづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり  
子齋十三  
書去三月書  
あふいづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり

三月書々

あふいづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり  
文政十三五九  
あふいづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり  
あふいづれり月しあふ別けしを風の袖のふりり

永正十八三月廿四日

三月晝夜

かろくちの寝るこころふんちんをいせぬおぼけ

永正七十四日

高砂

ゆたかしの宿の雲のたふしをばぬしむじのひら

ま

葛木山

永正二十四日

まがたてのたれなふせし花う葛木山のちてまがた  
まのふよたるての雲しつやめのかきかたつ花をぬき

志賀山

ゆたかしの宿の雲のたふしをばぬしむじのひら

志賀山

山越てしれぬあの本の鳥りつね花のちのうは

ゆたかしの宿の雲のたふしをばぬしむじのひら

春天

永正九七月十日

常物しれ冬あまりせしあきしてえもむらじのま

君代のりしつるあはらつてあはらつてあはらつて

春天象

ゆたかしの宿の雲のたふしをばぬしむじのひら

春天象

ゆたかしの宿の雲のたふしをばぬしむじのひら

春天象

こゝろにわがまのあはれをいひしめてよけのふとせむつら

永徳四月次

長文

文徳三十四月次

いれそえんいふ綴りたる娘のこころをまのよほどいへ  
やまのうらみのわりの涙ののいぬのあつらふふぶのしら

長音

明房やいかにあつらふうらみのつらうの花の木の毛あらし

春居和

禁中三月次

花のぬれよりいふそくなくせぬ世の中の花の家の家

長迷懐

又あつら花のよさをうけてあつらふの命をうけてしうらみあ

長尺敷

じやうやほのこゝろの花ののきよとてみまのいとせむら

長物振

まのこゝろをうけてあつらふのあつらふとてあつらひのこころ

いづれ水色の庭火ののぼるすれとあつらふのあつらふと

白牡丹のよさをうけて花のあつらひとてあつらふのあつらふと

續撰吟草録を母山有長

見ても又まてみゆけり初あつらひのいづれ長文あつらふ

長家在有長

永二六三十九

あつらひ花のうらみのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ  
あつら

松月春色

松山のふもとに松ありて、地を緑に染め、春の光をまはらす

松興多美

春の代のふぶきと、松のふくらみと、山をまはらす

春松興吟

君も今あはれしの松の代は、花のさきならぬと、なごませ

かゝりて、さもあはれなる松の代は、花のさきならぬと、なごませ

春の代は、さもあはれなる松の代は、花のさきならぬと、なごませ  
あはれなる松の代は、花のさきならぬと、なごませ  
君も今あはれしの松の代は、花のさきならぬと、なごませ  
かゝりて、さもあはれなる松の代は、花のさきならぬと、なごませ

とらしてさしつゝとていふまゝのくいのめいのみを  
夕しり床いさる衆のうらまへにちかかひあつらん  
入道内府亮元花をうらまへて

續撰  
ふしかがし花のうらまへにまよきてうらまへをさしとるを

四二一

君とて物あはれむらたつ男ゆり行く宿の花の下かけ  
愚亭庭花をうらまへて入道内府亮元ゆきて  
てはゆれこのまじうれをうらまへてはた病をうらまへ  
くや送つて其は花をうらまへてはた病をうらまへ  
てはまじつけはた病をうらまへ

續撰 一文三十三六

ぬくもて花のうらまへのひかたをかてらん花のうらまへ

むらりしわらと袖し花のうらまへにうらまへのものをあつ  
二月中旬雪うらまへたる明道一資也  
ふらむとて朝くるふ猶も花をうらまへて此のうらまへのまじ

西

はつと申しあつひめとてあつて花をうらまへて本の上宮  
亭祿二花見ゆは下宮よとてあつて  
うらまへて又のうらまへ

亮元

續撰一

年

年の花のまはりにまよふらわらえたらふまよあはれぬ  
日ぬ

花のまはりにまよふらわらえたらふまよあはれぬ

大承文入局ゆ府花のまはりにまよあはれぬ

ふらわらえたらふまよあはれぬ

一巻花

續撰一

ふらわらえたらふまよあはれぬ

日ぬ

宿の花のまはりにまよふらわらえたらふまよあはれぬ

大承文入局ゆ府花のまはりにまよあはれぬ

ふらわらえたらふまよあはれぬ

一巻花

續撰一

ふらわらえたらふまよあはれぬ

宿の花のまはりにまよふらわらえたらふまよあはれぬ

大承文入局ゆ府花のまはりにまよあはれぬ

ふらわらえたらふまよあはれぬ

花のまはりにまよふらわらえたらふまよあはれぬ

大承文入局ゆ府花のまはりにまよあはれぬ

ふらわらえたらふまよあはれぬ

日ぬ

年の花のまはりにまよふらわらえたらふまよあはれぬ

大承文入局ゆ府花のまはりにまよあはれぬ



夏の花もあはれなるものぞかし  
二月廿六日春日社より傳へての  
の文もよきものぞかし

二月廿六日春日社より傳へての  
の文もよきものぞかし

ついでに今も昔の花の文もよきものぞかし  
廿八日之信の平太院より頼政の扇の文も  
の花の文もよきものぞかし

頃ふ積石の昔の下の花の文もよきものぞかし  
又ついでに今も昔の花の文もよきものぞかし  
の文もよきものぞかし

首夏

夏の花もあはれなるものぞかし  
今も昔の花の文もよきものぞかし

首夏

夏の花もあはれなるものぞかし  
又ついでに今も昔の花の文もよきものぞかし

夏の花もあはれなるものぞかし  
又ついでに今も昔の花の文もよきものぞかし

朝夏

夏の花もあはれなるものぞかし  
又ついでに今も昔の花の文もよきものぞかし

永言六月次 長人

香いよしの花にささゆい花のよしの花をみ  
餘花

神人ろく月次あていからくつろ花のよしの花  
新樹

永言三月次  
花のよしの花のよしの花のよしの花のよしの花  
新樹風

永言四月次  
花のよしの花のよしの花のよしの花のよしの花  
新樹露

庭新樹

あふらのよしの花のよしの花のよしの花のよしの花  
新樹露

印花

女中あふらのよしの花のよしの花のよしの花  
靠印花

隣印花

千文明三  
忘れたくいの年のよしの花のよしの花のよしの花  
うねの地神あふらのよしの花のよしの花

續卯花

中力さらさらありきみよあてぬに花をたゞ

續撰卯花隠路

久しき道よりくさしうか花を中力よけり

奏露

うちよとくしにせせせせせせせせせせせ

株奏

あらんかきんくろくろくろくろくろくろくろ

と

かこあららるのたおのたおのたおのたおのた

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

待時

~~~~~

~~~~~

~~~~~

為圓舞

~~~~~

為圓舞

永元四ツリ

為圓舞

永元四ツリ

為圓舞

~~~~~

為圓舞

~~~~~

為圓舞

~~~~~

為圓舞

永元四ツリ

~~~~~

為圓舞

~~~~~

月夜集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

岩波ありし月の夜集

夜集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

院集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

雨中集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

思集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

海邊集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

湖集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

市集

おはらうの月夜集  
おはらうの月夜集

天明三四月欠 暮の教を

しぞかぬまじらふさへはるるをいひてはるるをいひて

永三五月欠 身もかた老

しほしほとくろよ路の今もなまも老樹のせうりひえ

惜事

あつてはるるをいひてはるるをいひてはるるをいひて

六月六日

あつてはるるをいひてはるるをいひてはるるをいひて

鬼草薔

あつてはるるをいひてはるるをいひてはるるをいひて

續撰吟集三 橋

橋の花をいひてはるるをいひてはるるをいひて

五橋

あつてはるるをいひてはるるをいひてはるるをいひて

聲言五橋

あつてはるるをいひてはるるをいひてはるるをいひて

砌橋

あつてはるるをいひてはるるをいひてはるるをいひて

五橋露

あふくしけしけしけ昔にけの袖花くら花の香にふとせ

通橋董砌

昔もふ人に見せらるる花の影にけの影の月もあ

社頭橋

瑞籬のゆせり花にけしけむらもあはれむら花

あつ橋

油ゆしけく世の今もあはれの花橋にあらすこと

じしきつちあはれけしけららのあはれけしけあはれあはれ

永徳ニスツリク

通橋院董

橋のみどりけしけふもあはれけしけあはれけしけあはれ

樽

永徳ニスツリク

雲乃ちしけしけあはれけしけの影の今もあはれけしけ

そりけふけしけ花にけしけの原ゆた花のゆきあはれ

早苗

草ふちあはれけしけあはれけしけあはれけしけあはれ

伏らけしけ代をけしけあはれけしけあはれけしけあはれ

うもいすもお田のいりけしけあはれけしけあはれけしけ

雨中早苗

あはれけしけあはれけしけあはれけしけあはれけしけ

田家早苗

千文明十三

秋門の霜葉のよこはらへ席のわきこぼるるを

六月句

うらみかゝるの川糸の夕日ゆきもよみかたの  
つちえとて水の傍の六月雨のうらみかたの  
落陽つる根のあまのこころのうらみかたの  
明應三六廿二水や所かほ示  
六月句のうらみかたのあまのこころのうらみかたの

霖

ゆきのなのはらもこころのうらみかたの

梅雨

永三六四月欠  
ゆきこゝろ物とふかひにふりゆき

文明十三二十九月

むらさきやうれぬりねちちのうらみかたの

五月雨

まのゆきあへあつ消しゆきこころのうらみかたの

夜夕日句

千文明十三  
まゆのよこはらへあつ消しゆきこころのうらみかたの

何れ句

千文明十三  
まゆのよこはらへあつ消しゆきこころのうらみかたの

六月句

永三六四月欠  
まゆのよこはらへあつ消しゆきこころのうらみかたの





夏月

の  
う  
中  
夏  
い

桐陰夏月

本  
文  
右  
左  
右  
左

右所夏月

右  
左  
右  
左

浦夏月

水  
上  
夏  
月

政遣火

火  
遣  
火

遠村取寄火

たふよつふつらのもつりゆらりゆくはるかなる

てふもみぢのわしひつるさるるのこゝろはなほひらけ  
年近ふぬかひはひらけりともめはるるはるる

裏堂

しつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつら

螢火速草

ゆらゆらにわらわらふつらふつらふつらふつらふつらふつら  
ふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつら  
永正十三年四月

續撰吟みふくさ 螢過忘

ゆらゆらにわらわらふつらふつらふつらふつらふつらふつら

雨中堂

永正十三年四月 水と螢  
あよめはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

水と螢

千文明十三  
ゆらゆらにわらわらふつらふつらふつらふつらふつらふつら

月下堂

あふまのまもつらふつらふつらふつらふつらふつらふつら  
花ほららららのつらふつらふつらふつらふつらふつらふつら

各册十三廿五元 口董

花のうらみかきいかなふいぬさうのさかたのあつたわはは

續撰吟集三 里董

なりのゆかりのあつたさうのさかたのあつたわはは

里董

わのいしゆいしゆのさかたのあつたわはは

杜宇

永元六月日胡舎夏景遊善よふこころしやうき  
あつたわははのさかたのあつたわはは

蝉

あつたわははのさかたのあつたわはは

瞿麦

あつたわははのさかたのあつたわはは

平玉元六日

あつたわははのさかたのあつたわはは

瞿麦

あつたわははのさかたのあつたわはは

瞿麦

あつたわははのさかたのあつたわはは

瞿麦

あつたわははのさかたのあつたわはは

雜 瞿麦

永元六月日

花のともやわらぬあけの日のませのうらたけのこぼれと梅子

夏草一

永正九百首

きしれつりてきめらる原の色なむとて花もも草もたけを  
夏草のさしにいづるあけの世に人ふよかけぬよふゆ

夏草露

永正二二六四日次

胡夕乃あしとてふの草の原あつて白の草しんぞわをく  
秋の露といぬえりう夏草のさけをいゆるを油乃たあ

風前の夏草

永正九四四日次

秋乃色よきふれん末し夏草れきたりけりかひるあけの夕凡  
夏草深

文龜三二四日次

三つりゆきつたの夏のあけをいふはうあけのどか

秋の夏草

千文明十三

秋のさくあけのうらむしをいふはうあけの森の下ま

夏草深

文龜二二四日次

夏草のさしにいづるあけの世に人ふよかけぬよふゆ

鳴夏草

これ月乃水のれくの川鳴しぬくと草のさけわ梅のあけ

續撰の二章二二四日次

三つりゆきつたの夏のあけをいふはうあけの森の下ま

国中扇

花のついでに  
夕影

わら日のすずはも  
夕影

すゝゝはつはほの  
池連

千文月十三  
かひぬめふ池のつらゆの秋ら  
月夜

月夜に  
夕影

浪のきわも  
遠村夕景

永三三月三日著  
雲をよこし  
夕立早過

夕立早過  
夕景

夕景  
橋夕景

夕景  
夕景

夕景  
夕景

ついでに... 中... 秋... 梅... 喜... 見

送樹夕立

夕立の雨... 村... 宿... 夕... 見

納涼

春日社法樂田

六月の... 日... 宿... 夕... 見

納涼風

夕涼... 納涼... 夕... 見

夫... 日... 宿... 夕... 見

山納涼

雲... 山... 宿... 夕... 見

水邊納涼

水... 邊... 宿... 夕... 見

松下納涼

松... 下... 宿... 夕... 見

樹陰納涼

樹... 陰... 宿... 夕... 見

簾納涼

松を立てば簾を捲きし山川の浪はたけむる秋の夕  
文明十四年八月廿日

船納涼

涼しむせのせりぬめ 蓮葉の花もかきす水の夕  
すしとさうらうとゆりとさうらうと月つづのつらむせん

松風三夏

蝉のこの名やうんこのなふへかふしじつるもつせのこえ

山泉

山泉のまじりつらむとじもふてよ夏の日記といつす人ん

晚夏

いふ涼しむせすかこのうら秋のぬんたん

晚夏虫

見ゆゆあしらのうらの月日や又秋はぬんたん

夏萩

みりけりていのうこれとて秋はさかす水のどつた  
續百首中奇名佳れ秋萩果 生清法中勸進明應六九廿七

見りけりていづれとて秋はさかす水のどつた  
續撰天永二祭裏春日法果百首のナリ

永正元六月廿  
永正元十二月廿

瀬夏萩

やうらうのいわのうらむせつ秋もさかす水のどつた



見り池川ちよふこのつとてかしのたかきつらきつら

杜母後

永正六四月次

本後若く小川をたゞし四後ともりの三の滝くさ涼

六月後

文應元三廿四月次

まの又のつたをちよふ政極あいのおほむいのかし四後す

かけこゝ人

平正三廿四月次

うたせつなつて今の老のなげうじあわむる人か

夏

女は海いかにて熱線のおりりていしや羽衣をきふにたり  
立ちあふせこのる衣うらまづい妻のいしうおほりつれあふる

いほわははらうのあまもやま旬の晴らうあつたのいし月  
あつたははらうのいし月う船つたあつたのいし月  
山つちやらははらうのいし月うつたあつたのいし月  
驚れあつたのいし月白妙うあつたあつたのいし月  
夕暮のるるるのいし月うらまづい妻のいし月  
あけしし物とまうていし月うらまづい妻のいし月  
見り池川ちよふこのつとてかしのたかきつらきつら  
いほしてむすし物とまうていし月うらまづい妻のいし月  
いら降のしすく人のちよふたれが入道内存る

續撰一

（けつそく）

世のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

海

水の西のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏雲

花のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏雨

吹とくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏夜

ひらけとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏山

續撰一

花のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

水の西のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏村

吹とくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

ひらけとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏野

花のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

續撰一

水の西のふたつとくみゆひら海の世のふたつとくみゆひら海

夏庭

秋すくはくわわ庭の夕々々に秋まら虫いかにあはれ

夏鳥

永正八十四日

鳥のあはれさる橋のほとけにさるる月かきまのいさ  
月よいまなきておくらり鶴のさる橋と秋をまひりえ

夏獣

夕すくはくすく又えあすけよれふのいさ

夏草

たつさ秋月さるらるの緒よあはれらるる夕の涼

夏香

久慈三十四日

花のさる花のいさけらるるけらるる池の涼

夏天象

續撰一六八六冊

夏のあはれさる月の色もあはれさるるいさ  
いさおのあはれさるるいさけらるるいさ

夏地儀

夏すくはくいさけらるるいさけらるるいさ

夏動物

あけおらるるいさけらるるいさけらるるいさ

夏迷懐

永正三十四日

あけおらるるいさけらるるいさけらるるいさ



夏景 なつ

夏景の一方の目玉は、  
山に雲が巻く姿が、  
心をとらへる。——

